

「する」と「される」の間の話

これまで数回にわたりアドバンス・ケア・プランニング(ACP)について紹介していますが、私たちの仕事の中で、ACPは広く「意思決定支援」という事柄に含まれる内容です。今回はその、人間の「意思」なるものについて軽く触れてみましょう。

意思と似た言葉に「意志」があります。使い分けはややこしいですが、辞書を見るとどちらかと言えば「意志」の方が個人の志(こころざし)や方向性を示すのに使われ、意思の方はややふんわりした「思い」や傾向を表すのに用いられるようです。ここではこだわらずにおきます。現代は法律も制度も、人にはそれぞれ固有の「自由意志」があるという前提で世界が動いています。何かをする人とされる人、加害者と被害者といった、「能動態と受動態」の対立構造で作られた世界観です。ある行為に対して責任を問う先がないと困るからです。

そんな中、能動でも受動でもない「中動態」という存在について考察した本があると知り、読んでみました。題して「中動態の世界 意志と責任の考古学」。実に興味深い内容でした。言語学について書かれた本ですが、まず、人がものを考える枠組みは言語の枠組みで規定されてしまうということに驚かされました。そして歴史の流れの中で、昔は存在した「中動態」が現在の言語の枠組みから抜け落ちてしまった経緯が、まるでミステリーのように展開されます。詳しくは紹介しきれませんが、私はその「歴史の旅」に付き合う感覚にワクワクして一気に読んでしまいました。

私たちは自分の、あるいは人間の意志というものが、まっさらな白紙の状態からゼロベースで発生したオリジナル作品だと思いがちです。しかし、これまで古代ギリシアの時代から哲学者や思想家が盛んに自由とは何か、自我とは何かといった思索を繰り返してきたものの、どうやら人の意志はその都度完全なオリジナル作品でもなさそうだ、というところへ話が繋がっていきます。人にはそれまで過ごした時間や人との関係性から完全に独立した自由な自我、などというものは事実上存在しないというわけです。本書によれば人は誰も完全に自由ではないと言います。そして「完全に自由になれないということは、完全に強制された状態にもならないということである。中動態の世界を生きるとはそういうことだ。われわれは中動態を生きており、ときおり、自由に近づき、ときおり、強制に近づく。」というのです。

言われてみれば日常の私たちは、完全に自発的ではないけれど、かといって強制されているのでもない、そういう意思決定を数多く繰り返しながら生きている。そんな流動的で主体のはっきりしない私やあなたが、関係を持ちながら毎日過ごしています。「あなたは

いったいどうしたいのか？」そう問い詰めることばかりが意思決定ではないのだと、改めて気付かされた思いです。ちょっと気が楽になりませんか？